＜東北地区納税貯蓄組合連合会会長賞＞

国県町という家族

只見町立只見中学校

１年　新国　太陽

身近にある税について父に聞いてみました。父の仕事は農家です。父が成人した時に、自立してハウス栽培を開始しました。当時学生をおえたばかりの父に、事業を開始する資金はなかったそうです。私の地域ではお米の減反政策に対して進行作物をハウス栽培することに対して県と町から補助金がいただけたそうです。父の事業は、減反政策の補助金によって開始されたということです。当時、その補助金を受ける約束事として５年以上は、農業を続ける規定があったそうです。父の、経営は今年で２０年目になります。父が経営開始に頂いた補助金とはいわゆる、税金のことでした。補助金でスタートした経営は今では所得税、予定納税、消費税付随して町県民税など毎年納税しているそうです。

冬になると私の町は大雪になります。私たちの通学路は早朝に除雪待のみなさんが除雪車できれいに、道を除雪してくれています。一人暮らしのお年よりの世帯では団金を納めると、軒下除雪をしてもらえるそうです。また、国道には、しょうせつといって雪を溶かす水が出ています。これもまた税金によっておぎなわれているそうです。

ぼくはこの話を聞いてぼくの身近にも税金があるか考えてみました。ぼくは小学校のころから剣道を続けています。剣道の練習は日中は中学校の体育館、夜は町の体育館で練習しています。そこで使用している体育館も夜の練習で使っているライトも税金でまかなわれています。私たち学生は納税しているとしたら、練習がおわった後に自動販売機で買うジュースの消費税くらいのものです。学生は納税者にはなれません。消費者なのです。しかし父の話しを聞けば税金のうえになりたっている施設を大切に使用することが仕事だと思います。そして業界で父の仕事は補助金という名の税金を土台に出発して今では事業主

としてさまざまな納税をしています。父と同世代の人たちの納税によってお年よりからぼくたち若者の生活が守られているのだなと思いました。家の中でなにか故障があれば父がお金を出して直すでしょう。町に災害がおきれば町という父が道路を直したり建物を直したりすることでしょう。国、県も同じわけです。町民また国民が一つの大きなおさいふにお金を集めて今必要な物、今困っている場所それらに平等性をもってお金を割り振りする、それらが税金なのだと思います。それを考えると国民が一つの大きな家族として税金に支えられているのだなと思いました。